

地域密着型インターンシップ@NPO 法人素材広場

最終報告書

9期生 ちき

* 研修の目的

私はゼミの先生の紹介で、この内閣府のインターンシップ事業を知った。そして福島
の素材広場での受け入れがあることを知り、震災後から関心があった福島の今後の復興
ビジョンや、実際に震災にあった人のお話を聞きたいと思い、大学の長期休みを活かし
て1か月のインターンシップに参加することを決めた。自分の専攻である「観光」「ま
ちづくり」「地域活性化」などについて、現場を見て理解を深めることと、被災された
方のお話を実際に聞くことが目的。

* 観光復興

会津復興モニターツアー（9月17日(土)～9月18日(日)）

震災による直接の影響は少なかったものの、風評被害により大きなダメージを受け
ている会津地方。福島県外に住むメディア関係者の方を会津の本気でお迎えし、会津
復興の応援団になってもらおうという目的。

（自分の役割）お客様向けのスケジュール作成、会場視察、当日のスタッフ

当日が近づくにつれて、事務所内はど
んどん慌ただしくなり、観光復興チーム
やスタッフの皆さんは遅くまで作業を行
っていた。大きなツアーを企画し実際に
開催するための裏側を初めて経験し、当
日の細部のことまで考える創造力とスタ
ッフ間の連携、そして並々ならぬ苦労と
入念な下準備が必要であることを知った。

メディア関係者の方は、一般の観光客
以上に、情報を広く発信する力を持っている。実際に会津の生産者と出会い、話をし、
生産者が作ったものを口にした参加者のみなさんが、会津をどのように感じ、今後ど
のような情報を発信していくのだろうか。ツアーが終わって満足するだけでなく、そ
の後の動向も見てみたいと思った。



花ホテル滝のや (9月3日(土)、9月4日(日)、9月20日(火))

(自分の役割) 営業再開に向けた旅館内の片づけ作業、観光客お迎え企画

7月末の大雨により只見川が氾濫し、大変な被害を受けた会津柳津。花ホテル滝のやは、床上1メートルの高さまで浸水し、一階部分はほぼ泥まみれだったようだ。しかしながら、私たちが訪れた3日と4日には、泥などはなく、営業再開へ向けた前向きな作業がほとんどだった。片づけが粗方終わり、帰り際に支配人の塩田さんとお話「門前町サミット」に際し、お客様をお迎えするための寸劇的な企画を私たちに考えてほしいとのお願いがあった。その企画のミーティングのため、20日、三度目の会津柳津訪問となった。久しぶりに滝のやに行くと、きちんと営業を再開されていた。表の看板には宿泊に来られるお客様の名前が下げられており、ミーティング中も電話が引っぱり無しに鳴っていて、とても安心し、うれしく思った。門前町サミットを皮切りに、着地型観光に取り組もうとしている柳津温泉。塩田さんはたくさんのアイデアを考えているようで、そのうちどんなものが実践されていくのか、来年在らしみだ。



山形屋 (9月17日(土)、9月27日(火))

(自分の役割) 絶叫大会への参加、山形屋の料理の採点

横田さんが出席した熱塩加納地域づくり懇談会のつながりから、喜多方市の道の駅で開催された喜楽里博の熱塩ブースでの小イベント、「絶叫大会」に参加した。絶叫大会の参加人数は20名ほど。絶叫の内容は自由。場所は山の山頂付近。声の大きさ、アピール、絶叫の内容の3つの採点ポイントから、3人の審査員によって点数がつけられる。3位はお米10kg、



2位はステーキ肉1.5kg、1位はステーキ肉3kgが賞品。私は惜しくも4位だった。絶叫の内容は自由であったが、ほとんどが福島の復興と風評被害の払拭を願う声であった。職種も世代も国も問わず、福島を思う気持ちの強さを実感したイベントであった。ちなみに、1位はアメリカ人の男性。絶叫大会は、2回目にして世界大会になっ

てしまったようだ。

また、会津の経営者アカデミーという集まりで、山形屋さんのお料理の採点をする飲み会にも参加させていただいた。自己紹介と、「会津の冬をどうするか」という瓜生社長から出されたお題について一人一人語っていく。瓜生社長が語っていた「今こそ郷土愛」という言葉が印象的だった。これからは、福島県の中の会津地方であることを自覚し、会津から



から福島を支えていかなければならない。ほかの参加者の方も、被害が大きかった浜通り、中通りの人を支えるためにできることを語ってくださった。前回の絶叫大会同様、福島を思う気持ちがいっぱいの空間であったと思う。そして、料理がとてもおいしかった。

* 農家研修

渡部柿園（9月14日(水)）

（自分の役割）反射シート敷き

インターンシップ折り返し地点を目前にして、渡部柿園さんで農家研修デビューを果たした。会津みしらず柿の由縁と、みしらず柿は渋柿であるから鳥などに食われる心配はないということを知った。地面に近いところに実ってしまった柿にも、日射が当たるようにと、柿の木の下一面に反射シートを敷き、杭でとめていく作業を行った。この日は渡部さん夫婦ともうお二方、そして研修生3人、合計7人で作業を



行ったが、これだけ人数がいても一苦勞な作業であった。あの反射シートは結構高価であるらしく、手間もかかるため、このシート敷きをきちんと行っている柿園さんは少ないそうだ。渡部さんは20か所ほど柿畑を所有しており、すべての畑でシート敷きを行っている。手を抜かないこと、とはよく言うが、実際にはとても難しいことのように感じた。柿の収穫は10月の下旬から11月半ばほど。風評被害に不安を感じているそうだが、無事美味しい柿に育ち、たくさんの人の手に渡ることを願うばかりである。

築田さん（9月16日(金)、21日(水)、22日(木)、26日(月)、27日(火)）

(自分の役割) モニーツアーの事前準備、じゃがいもの選別、枝豆の収穫→袋詰め、にんじん畑の草むしり、ナスの収穫、ピーマンの収穫→袋詰め、キャベツ畑の草むしり、ネギの草むしり

築田さんのお宅は、幸せな家庭の見本のようだなあ、というのが第一印象だった。築田さんは行くたびに、たくさんの作業とお昼ご飯と手土産をくださった。しかし、副業や趣味ではなく、農業を自分の仕事にすることが、いかに大変なことなのか。築田さんのお話や、実際の農作業をお手伝いする中で、ひしひしと感じた。風評被害という実態のない敵との



戦いは、長期戦になってしまうかもしれない。それでも、毎日美味しい野菜を作り続ける、築田さんなどの農家さんの姿を見ていると、こちらが元気づけられるのと同時に、自分たちの力ではどうしようもできない問題に、もどかしい気持ちになってしまう。食の安全が叫ばれている現代だからこそ、安全性を証明し、胸を張っておいしい生産物を少しでもたくさんの人に届けてほしいと思う。

* 仮設住宅

美里町仮設住宅 がんばっぺ檜葉祭り（9月10日(土)）

(自分の役割) カラオケ大会のお手伝い

会津美里町にある仮設住宅。そこには浜通りにある檜葉町というまちの住民の方が避難してきている。この日は受け入れ先である美里町と、避難してきた檜葉町の人たちが協力して、仮設の駐車場でお祭りを開催した。駐車場の真ん中に組まれた櫓を舞台とし、伝統舞踊やギターの弾き語りがあり、カラオケ大会、盆踊りという演目だった。



カラオケ大会には10人(組)がエントリーし、歌う人も聞く人も楽しんでいる様子だった。こどもたちやおじいちゃんおばあちゃんはたくさん見受けられたが、大きな仮設住宅であることを考えると、出てきている人数は少なくも感じられた。しかしながら、活気があってとてもいいイベントであったと思う。

東部公園仮設住宅 料理教室 (9月12日(月))

(自分の役割) インターン生フジさんの補佐として準備

東部公園の仮設住宅で生活を送る大熊町のお母さんたちに、お料理を教えてもらい、仲良くなろうという企画。大熊の仲良しお母さん4人組のうちの1人、Sさんの故郷である岩手県の料理、「かけばっと」を作った。私はまぜごはんのほうを作っていたのだが、かけばっと作りはうどんを作るときのような道具と材料で、和気藹藹と楽しそうだった。まぜごはんは、15合分のお米をとぎ、それに見合った料の具材を切ったり煮たり、さらに炊けたごはんと具材を合わせるなど、ちょっと一苦労だった。お母さんたちと初めてあった研修生たちも、たくさんお話をしていたようで、いい交流会になったように思う。



私が反省すべきは、自分のインターンシップ期間中に第2回目を開催できなかったことである。日程調整はもっと早くからするべきであったし、料理・場所・費用などすべてにおいてアバウトにしか考えていなかった。何かを企画したときに、そういった基本となる情報を、一変二変させてはいけなかった。そこで躓いていると話は全く前には進まないし、何より周りに迷惑をかけてしまうことがよく分かった。

松長団地仮設住宅 カラオケ巡回バス (9月28日(水))

(自分の役割) カラオケのお手伝い

松長団地という、とても広い敷地に建てられた仮設住宅にカラオケ巡回が行くということで、お手伝いに行かせていただいた。今回はバスの中ではなく、広い集会所を使ってカラオケを行った。私がお手伝いしたのは、午後1時から4時までだったが、歌いにきたのは3人だけだった。内訳してみると、仮設住宅外に住んでいる方が2人、近くで工事をしていたお兄さんが1人。仮設住宅の方は実質0人だった。約200戸の大きな仮設住宅だったので、集客がいいことを予想したのだが、残念な結果に終わってしまった。カラオケを歌っていった仮設住宅以外に住まわれているお二方は、震災後8回の移動を経て、今は会津若松市内にアパートを借りて生活をしているそうだ。だんだん会津若松市に打ち解けてきて、若松のお友達も増えてきているという。半ばサクラ要員の立ち位置で、誰かが来るようにとずっと歌ってくださった。外を見渡してみたところ、この日は天気がよく涼しかったのだが、仮設の敷地内にあまり人

影がなく、全体的に静かだった。仮設住宅自体が大きいから、カラオケをやっているも気づかなかつたり、敬遠したりしているのかなあとスタッフの方は話していた。次回開催のときには、周知をもっと積極的にすることと、人目につくように駐車場にバスを停めて開催するのがいいのではないだろうか。

* まとめ

仮設住宅でやりたいことが、本当はたくさんあったのだが、段取りの悪さで一つも何もできずに帰る時間になってしまったことが悔やまれる。やりたいことを実行に移すまでの手順を、きちんと考えなければいけないと思った。また、組織の一員としての自分であることを考えながら活動することは、私の中でまだまだ薄い意識だったので、これから自分本位だけでなく、周りのことを考えながら行動することが大事であることを知ることができた。

愛媛にいるままであったら、絶対に一生出会えなかったであろうたくさんの人たちと、出会って交流して、何にも代えがたい時間を一緒に過ごすことができた。20歳という節目を迎える直前に、ここ会津に来て、たくさんの人と話し、人一倍考えて行動する時間をいただけたことは、自分の中で自信になった。私には、報道関係者のような強い情報発信力はないが、地元愛媛に戻って、私が1か月見てきた福島県を、どんどん周りに伝えていきたい。

